

親子で育てるみかん畑の地頭鶏



細川豪邦(ほそかわひでくに)さん

昭和38年生まれ。市内の高校を卒業後、重工業メーカーに30年間勤務。平成19年から兼業で農業を始め、体が元気なうちにやりたいことをやろうと考え、会社を退職し、平成26年に専業農家になりました。

細川潤将(ほそかわみつゆき)さん

平成6年生まれ。市内の高校を卒業後、東京都内の大学に進学し卒業。23歳で日向市に帰郷後すぐに父から誘われ、人手が足りないを知っていたこともあり、農家になりました。

豪邦さん)

中学生の時には、既に家業であるみかん・へべす・しきみ栽培の手伝いをしていて、将来的には農業をしようと思っていました。いつの時代から始まったかわからないほど、先祖代々農業を家業としており、父も79歳に事故で亡くなる当日まで農業を続けていました。養鶏業を始めたきっかけは、平成19年にみかん栽培の雑草対策で、ニワトリをみかん畑で飼育を始めたことです。また、翌年から、地頭鶏の飼育を始め、現在も続けています。始めた頃は生鶏の出荷だけでしたが、令和4年から地頭鶏の生産加工と炭火焼きまで行うようになり、市内飲食店や宮崎市のホテル、東京・大阪・福岡などの大都市のホテルに取り扱っていただいています。

潤将さん)

父からの誘いを受けて、初めは、基本となる飼料の詰め方・捕鳥の仕方・雄雌の見分け方を学ぶことから始まりました。飼料は1袋20kgもあり、始めた頃は、給餌に1時間半以上かかり、手の皮もよく剥けていました。現在は、父が鶏肉の加工のため、朝4時半には美郷町の加工場に向かうことから、特に午前中の作業は基本的に毎日一人で行っています。

[苦労していること]

まず、始めた頃からイタチ・タヌキ・イノシシなどによる獣害に苦労させられてきました。一晚で30～40羽、一番多い時には、200羽以上の被害にあったこともあり、被害に遭ったとわかった時は、頭が真っ白になります。辛い思いをしないためにも、毎日の戸締りや侵入防止対策を徹底しています。今、ウクライナ情勢の影響で、特に経費の7割近くを占める飼料代が従来の3割ほど値上がりしているため、その対応にも苦慮しています。近年の気温上昇も気がかりで、特に生後2週間までのヒナの時期は、体温調節がうまくできないため、常に室温32℃の環境で飼育する必要があります。しかし、現在の設備では、気温が38℃を超えてしまうと対策できず、飼育できなくなってしまいますので、成長した地頭鶏にも影響し、高気温になると大量死してしまいます。

[こだわりを教えてください]

極力地頭鳥にストレスを与えず、のびのび過ごせる環境をつくり、保つことにこだわっています。みかん畑で育てることで、周囲の林やみかんの木で木陰が確保でき、地頭鶏が快適に過ごせる環境を整えることができます。また、農場に雑草が侵入してしまうと環境が損なわれるため、日々雑草とも闘っています。飼育密度も宮崎地頭鶏の基準である2羽/平方メートルよりも少ない、1羽/平方メートル以下に抑えて快適な環境を追求しています。日々の努力の甲斐もあり、品質を認めた大都市のホテルなどが、年に3、4回来園し、商談を行っております。



[今後の展望は]

現在は、年間12,000羽を出荷していますが、販路の拡大や6次産業化に力を入れ、単価の向上を目指し、飼育羽数を減らしていきたいと考えています。飼育羽数を減らすことで、労力の軽減に繋げて、親子で永く続けていきたいと思えます。